

## 西北研究所の思い出

——藤枝 晃博士談話記録——

藤 枝

晃 述

原 山 煌 編注  
森 田 憲 司

は し が き

敦煌学の世界的権威で、京都大学名誉教授の藤枝晃博士（現文化財保護審議会専門委員）は、次に掲げる略歴にもあるように、昭和一九・二十年、当時の蒙古連合自治政府の首都、張家口に設立された日本政府系學術機関、西北研究所のメンバーであった。戦前の大陸における日本人の學術活動に関心を有する編者等は、以前から博士に、この研究所についてお話をうかがうことを、お願いしていたが、

今回、それが実現した。戦前の大陸における日本人の學術活動については、満鉄調査部など、一部の組織についてはともかく、他の多くについては、ほとんど明らかにならな  
おらず、しかも、博士のお話は、日本の傀儡政権である蒙古連合自治政府の実態についても、興味深いものを含んでいる。以下その談話を再録することによって、研究の資料として提供したい。

藤枝 晃博士略歴

凡 例

一九一(明治四四) 大阪に生れる。

一九三四(昭和 九) 京都帝国大学文学部史学科卒業。

一九三七(昭和一二) 東方文化学院京都研究所入所(三八

年 東方文化研究所と改称)。

一九四三(昭和一八) 居庸関調査に参加(隊長、村田治郎

京大工学部教授)。

一九四四―四五(昭和一九―二〇) 西北研究所所員。

一九四六(昭和二二) 帰国、東方文化研究所に復職。

一九四八(昭和二三) 東方文化研究所、京都大学人文科学

研究所に改組、同助教授。のち教授。

一九七五(昭和五〇) 同停年退職。京都大学名誉教授。

一 このインタヴューは、一九八六年三月一二日に、京都大学

人文科学研究本館で行なわれ、編者二人の他、杉山正明(京都大学人文科学研究所)、斎藤清明(当時毎日新聞京都支局)、

藤本ますみ(エッセイスト、元梅棹忠夫氏秘書)が、同席した。今回掲載したものは、当日の録音テープによって編者が

再録編集し、博士に校閲していただいたものである。

二 再録にあたっては、博士の口調をそのまま再現することに努めた。上の略歴でも分かるように、博士は大阪で生れ、以

後京都で過ごされた方であるため、関西以外の方には、読みづらい箇所があるかもしれないが、御了承いただきたい。

三 文中、「」で示したものは、編者による挿入である。

四 このインタヴューの後、再度博士にお話をうかがったほか、中尾佐助、磯野誠一、磯野富士子、梅棹忠夫(訪問順)

の諸氏に、お話をうかがい、それによって、この談話の内容を補正させていただいたが、本文中には特に注記していない。

五 次頁の張家口の地図は、京都大学文学部地理学研究室助手利光有紀氏に作製していただいた。御礼申し上げます。

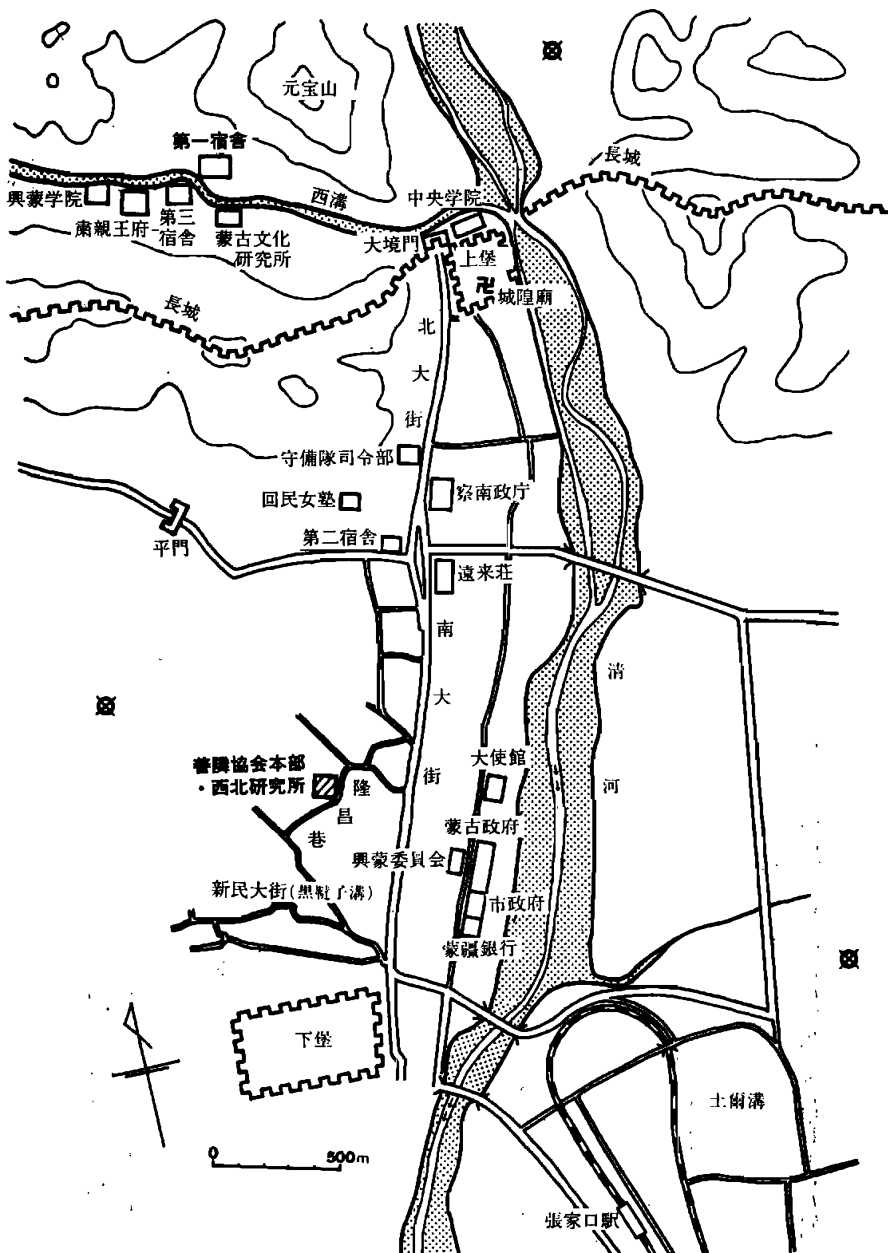


図1 当時の張家口

藤枝 この西北研究所については、公式の記録ちゅうのは、何もないんですな。何かを発表する前に、終戦になって、解散したさかい。やや公式の物として、この『善隣協会史』ちゅうのがあるんですわ。けど、極めて僅かしか西北研究所のことは出てへんねん。後に年表が付いてますがな、年表には西北研究所が出来たというのと解散したというのと二行しかないのや。この『善隣協会史』というのは東京の善隣協会をむしろ主にしてあって、蒙古は従であって。今日の眼目、ご注文の西北研究所の歴史というより話やな、それどんなもんやったちゅう。なるほど皆さんにとつては、得体の知れんもんやと思う。それに関連して、蒙古政府ちゅう、これが甚だ得体の知れないものであった。その話が当然出てくるのでね。

で、順序として、西北研究所員の名簿を先ず作ってみたんですわ。所長今西錦司で、次長石田英一郎、それから、中が大体文科と理科と。理科系は、森下正明が主任、中尾佐助、その下二人、カッコがついてるのは、梅棹忠夫はこの時、大学院学生の現役で来たもんやから、正式の所員になれなんです。で、嘱託研究員とか何とかいう名前やつた。ところが、無給ではメシが食えんので、嫁さんが図書

### 西北研究所員列名

| 所長   | 今西錦司 | 次長   | 石田英一郎 |
|------|------|------|-------|
| (理系) | (文系) |      |       |
| 森下正明 | 藤枝晃  | 中尾佐助 | 磯野誠一  |
| (梅)  | "    | (梅)  | "     |
| (和)  | 酒井行雄 | (和)  | 酒井和衛  |
|      | 甲田杜夫 |      | (菊)   |
|      | (加)  |      | (野)   |
|      | (野)  |      | (酒)   |
|      | (酒)  |      | (梅)   |
|      | (梅)  |      |       |

掛で給料貰うて、それで梅棹食わして貰うてた。和崎洋一は、四四年の探検だけ来て、探検すんたら、京都へ帰ったんで、それで、この二人はカッコになつてゐるんです。

それから、文科系では、僕が主任という事になっていて、磯野誠一。それから富士子は、名前だけ研究員で、月給出てないんです。酒井行雄、これは、広島心理学を出したんで、僕より年上やったか、年下やったか、それが思い出せないのや。同年配ですがね。それから、甲田和衛、これは、

阪大の人間科学部長をやつて、一昨年から去年か定年になつて。その他に、下に三人カッコしてあります。これも、この三人は、それぞれ正所員やつたんやけども、途中で出てしもたんや。出たということは、はじめ正所員になつたもんが、続かなかんだ。という事は研究所の影の部分になるのやけど。他に、酒井功というのが事務員で、おつて、『**蒙疆文学**』の同人で、文学青年やつた。

善隣協会に調査部というのがあつたんです。善隣協会といふのは、そもそも、その時分、新京で最初出来て、東京に本部があつて、つまり関東軍の一步先に出ていって、民間に入り込むという謀略団体ですわな、今の言葉で言うたら。当時の言葉では国策団体。それで、満洲からドロン・ノールを通して、内蒙古にずーっと軍隊より一步先に出て行つた。勇ましい団体なんです。それで、ある時期に、十年程経つて、昭和一五年に東京と現地とを分けて、東京の方は、財団法人善隣協会、そして現地の方は蒙古政府の財団法人で、蒙古善隣協会という別の団体にして、東京の協会の束縛を受けないで、勝手な事を出来る状態にして。そこに調査部というのがあつて、後藤富男君が部長で、後藤君ちゆうのは、御承知のように大變な才子で、有能な人やつ

たから、どんどん本を出しまして、ところが、二年そこそこで、後藤君は、ほり出されたか、飛び出したかして。

原山 応召と違ふんですか。

藤枝 応召の前。満洲国の役人になつた。そこでまた色々と計画しておつた様子がね、『善隣協会史』の中の、音尾秀夫の「後藤富男君の軌跡」という文章にある「二三三頁」。それから、役人になつたりして、応召になつて、全てがつぶれるのやけども。

善隣協会の調査部いふのをつぶして、その予算の枠で、純粹科学的な学術研究所をという方針を、どこかで決めたい。研究所たてたのは、日本側の方針らしいというやうなことが、『善隣協会史』に書いてあつて、協会の知らん所で、そういうものが、とにかく出来ていくのや。

それで、僕の個人的事情を話すと、その前の四三年に蒙古政府の蒙古文化研究所の招きで居庸関の調査に行つたんです。予算としては、昭和一八年度の枠が有るから、西北研究所を作ろうという動きは始まつた。われこそは発案者やという人がいっぱいおつたわけや。その一人が江実、蒙古文化研究所のね。もう一人は岡正雄、民族研究所。もう一八年に来ておつたんが、磯野誠一と酒井行雄の二人や。

そこで、僕にもこの研究所に入れという事になった。そして、その時、今西さんも所長候補やった。所長候補、何人かおったけども、最有力は今西さんという事になってたんだよ。つまり、江さんも、岡さんも、今西さんを推してた。

そして、岡さんの考えとしては、これを民族研究所の支店、出張所みたいに、つまり、子研究所にしようという。それで、まず、石田英一郎を送りこんだ。磯野・甲田・野村という、民族研究所からはみ出した、つまり、民族研究所をこしらえる時に、定員があつて入りきれなんだ人、皆ここへ送ってきたんやね。そして、今西さんが所長になって、理科系。それから、文科系では、京都から行ったんは、僕一人。他は一応岡さんが送りこんだわけですわ。そういう事で、民族研究所の影響は、極めて強かつたんですが。その時に、今言うた磯野も早くから来ていて、善隣協会では、前の年から磯野君を雇って、興亜義塾という学校があつて、その先生にしていた。

善隣協会調査部をつぶした時に、菊地杜夫<sup>(3)</sup>というのだけが東京へ留学しとったんやね。たしか興亜錬成所やなかったかと思う。そやから、その時のイザコザに巻き込まれなくて、留学期間がすんで蒙古に帰ってきたんや。それでこ

れも研究所員となる。それから野村は学士院嘱託。加藤泰安ちゆうのはね、ヒマラヤ登山で有名な。ああいう登山パティのマネージャーとして日本一と、今西さんは認めてたんや。それで善隣協会の総務部長にするつもりで、その時まで日航に勤めてたんをね、辞めさしてね。加藤の嫁さんは今西さんの姪なんですわ。きれいな人やった。それで、四四年の今西エクスペディションのマネージャーをやつて腕を見せたんやけども、帰ってきたら、これは学者やないから、とにかく落着き悪うて、北京に嫁さんのおやじさんが財閥でおつて、そっちへ行つてしもた。途中で消えたんや。菊地も途中で、包頭出張所長というので、出て行った。野村も磯野と入替わりに興亜義塾の先生になって出て行った。

つまり、今西一派というものと、別の派となかなか折合いが難しかったということなんや。今西さんは一九〇二年生まれ、僕は一一年生まれで九つちがいです。一番若い梅棹、甲田が、どっちも二〇年生まれ、九つちがいの。僕はちようどまんなかでね。所長・次長は善隣協会の職制では理事という役員になつてゐる。それから、理事長というのが陸軍中将やから、職員に階級をつけよつてね、参事・副参事

・主事とかいうてね。僕と森下がそれぞれ理科と文科の主任という事で、参事になって、あとが皆副参事で、甲田だけが主事やったかな。これだけが全員ですわ。

それぞれ、所員の前職が要るな。今西さんは、その時分理学部講師やっただす。農学部でて理学博士でて理学部講師や。『善隣協会史』の中にもちよつと書いてあるけど、「二〇九頁」、医学部の興亜民族生活科学研究所かの研究員兼ねて、そこで給料は出てたわけや。戸田正三教授が所長のとこや。その戸田さんの養子が同仁会病院に来てましたな。

病院というよりは研究所、同仁会の医学研究所があつて彦チブスなんかの調査やつた。石田英一郎は何してたんか知らんのやけど、三・一五で牢屋へ入って、それから出てきてウィーンへ行つて人類学で学位取つて。向こうへ行ってからでもしよつちゆう特高は監視しとつた様子やつたね。蒙古から帰つてからは東洋文化研究所、東大の。森下君は理学部の助手でね、アリの社会学の専門やつたんや。中尾佐助は農学部、木原門下で栽培植物学やつた。梅棹は大学院生。僕は東方文化研究所で、図書掛から歴史研究室へ移つたところやつた。磯野は東大出てセツルメント運動やつた。富士子は日本女子大出でね、一九一八年生まれ

ですわ。今はパリのラティモア研究所に勤めてる。酒井は広島心理学出て、その時まで何してたか知らんのやけども、帰つてから広島私立の女子大の学長なんかやつた。甲田は、人口問題研究所におつたのが、岡さんに抜かれてやつてきて、帰つてから阪大の社会学の教授で、今放送大学。菊地は、早稲田の法科出て、調査部におつたんやけども。加藤は日航。野村は、東大の言語学出て、学士院の調査室、帰つてから名古屋大学に定年までおつたですわ。

それでね、宿舎におると、皆それぞれ出身が違ふもんやからね、今西さんは「さあ、出かけよ、学校行こ」と言うて。僕は「研究所行こ」と言う。菊地は「本部へ行く」言うねん。野村は「これから役所へ出かける」て言う。皆ね、生い立ちちゆうか、素姓で言い方が違ふ。今西さんは、面白いなあ言うて、いっぺん晩飯の時笑うとつた。

原山 昭和一三年一月二十九日の読売新聞に、後藤富男氏が西北研究所を作るプランを持って東京に来ていたという記事を、小林高四郎さんが書いていたというんですが「小林高四郎「蒙疆随」の文化人」後藤富男」「善隣協会史」一二五頁」、そんな以前から、西北研究所を作る計画が

あったのですか。

藤枝 後藤富男君は、昭和一一年頃やったか、『蒙古学』第一冊作る時に、京都へ相談に来て。僕はその時からのつきあいなんやけども。昭和一三年頃は、僕は後藤君とは接触ないのや。

研究所というのはね、日本では机の上で本読むのが研究やね、本読んで論文書く。ところが、現地へ行きますとね、研究というのはフィールド・ワークです。日本ではそういうのを調査と呼んでる。調査というのはね、現地では情報活動なんです。情報調査が調査で。そういう具合にちよつとずれてくるんです。現地語と内地語と、ちよつとズレがあります。

もう一つはね、旧調査部の役割とか仕事というのは、僕らが行った時は、こつちも聞こうとせんし、そういうもん何も言おうともせんんだ。そういうの知ってね、得することは何もないんですわ。但し、善隣協会というものは、西北へ出るための謀略機関です。それでこの研究所も、西北研究所となつてる。ところが、研究いたらフィールド・ワークせんならん。それが出来んではないかと言うと、本来西北のフィールド・ワークするのやけども、今、日本の実力

として西北のフィールド・ワークは出来んから、そのへんで準備調査をして、調査の練習さしておく、というのが土橋中将の言葉ですわ。しかし、そこは蒙古であつて、蒙古政府の領内やから内政干渉になるような現地調査はするなという。けれども大いに内政干渉となりましてな、「梅棹事件」やとかなんとか起こるんですがね。

そういうことで、何年中断の時間もあるし、予算と建物と備品とは継承してるんやけども、昔のことはあんまりこつちも追究せんことにしとつたんや。出版物でも、調査部の頃出してた『蒙古年鑑』とか『蒙古大鑑』とか、要するにノリとハサミで作つとるからね。研究じゃないわけですわ。

ついでに言いますと、戦後にね、マードック・ファイル、HRAFという京大図書館にもあるやつ、あれは、世界諸民族の民族的資料をとにかく全部英語にしてカードにしたもんやけど、あれ作るのに戦争中の蒙古・満洲における日本人の現地調査、全部集めたんです。そしたら、それが全部なにかの報告の丸写しばかりなんやな、日本人の仕事ちゆうのは。あの時分、一つの考え方がありましてね。自分の目で見たことを書いたんは権威がないと、本になつた



物は権威があると、そういう考え方があって、自分で現地調査しながら、報告書を書く時は前のを丸写しにするんです。そやから、すべての報告はさかのぼって行くとね、これは梅棹と僕とで発見したのやけれども、満鉄の『満蒙全書』というのと、参謀本部の『蒙古地誌』、三冊のごつつい、皆そこへ落着く<sup>あ</sup>のや。オリジナルな、目で見た事を文章にした、そういう學術報告は、京城大学の報告が最初のもので、それから西北研究所員のいろんな報告になるわけやね。そやから、昭和一七年以前に日本人の本当の現地報告らゆうのはない。それから、雑誌『蒙古』に善隣協会調査部員の報告があるねん。向うに行つて聞いたたら、それは出鱈目のもんであつたんや、統計もなにも。たとえば人口統計作るのに、年齢構成あらわす人口ピラミッド、実際の調査の物を二で割つて、男・女にふり分ける。意味ないのや。その頃の日本人の調査の中味いうたら、大体そんなもんですわ、皆。もつとも、我々の調査についても、占領時代に日本人が占領地で行なつた調査は信用できんと、ウイレム・グロータスに言われて、ギャフンと参つただけどな。

原山 昭和一五年に、善隣協会張家口本部の調査部ができて、それが昭和一九年になつて西北研究所になるとい

形ですわ、制度上は。

藤枝 予算上やな。そやから中間にスキ間があります。

原山 菊地さんはもとの調査部にいたのですが、他の調査部のスタッフはどうなつたんですか。

藤枝 人員整理になつたのか、ケンカしてなにしたんか……。菊地は、調査部の頃はよかつた、毎日そんな話ばかりしてた。後藤というのは頭が良うて、などと言うてた。調査部のそういうもんを受けついでは損や、というなにかあつて。蒙古善隣調査所というややこしい名前のもんがあるけど、系統としては無関係です。

次に、善隣協会の中での西北研究所の位置づけやな。蒙古善隣協会というのが、東京の善隣協会から一九四〇年に分離した。どつちも、理事長は陸軍中將ですわ。張家口に本部があつて本部の理事長は土橋一次陸軍中將<sup>あ</sup>。その時予備役になつたばかりです、まだ予備役のバリパリや。鹿児島の人や。今西さんが行く前に、土橋中將も、ほぼ同時に張家口に着いたんですわ。その時善隣協会の大改革があつたわけや。

蒙古善隣協会ちゆうのは、日本政府が張家口の大使館を通して、全額助成してた。東方文化研究所も大東亜省の全

額助成団体で、年一二万円、東方文化は貰うてた。そやから、僕は、大東亜省からの指図で東方文化研究所から西北研究所へ出向という形で行ったんや。その時の書類いうたら、大東亜省からの、今度うちがこしらえる西北研究所の要員として、この男が必要やから、本人の言う通り出したってくれ、という手紙が一つ、それだけしか手続してない。極めて簡単にいったんですがね。

協会の総務部長に、やはり鹿兒島人の上西園操という、八〇キロか九〇キロのゴツイ男や、それを土橋中将が連れて来た。東京で会った時に、協会全体のマネージャーの総務部長、有能な人物欲しいというので、今西さんは、加藤泰安を総務部長候補に連れて行ったんや、そしたら、別に上西園が来たもんやから、加藤は研究員ということになつて。上西園は東亜同文書院を出た豪傑ですわ。それが召集されてね、代りに音尾秀夫という、これも有能な人物でね、前に善隣協会におつて、その後同仁会に移つたのを、又、呼び戻してきて。

張家口の本部の中に西北研究所がある。そやから、本部事務室というのは、研究所の事務室みたいな形やったな。七、八人しか事務員がおらんて。

本部の近くに回民女塾というのがあります。イスラムの女学校、全寮制で。これは、是永〔童子〕<sup>(9)</sup>という大分県のオバハンがやってたんや。この人は、その前に朝鮮で小学校の先生をしてたんや。その時分の日本政府の朝鮮政策ちゅうのは、朝鮮人をどこまで同化するかやったから、苗字やめまして、日本語を普及させてという。それをそのままもってきて、日本語をメチャクチャに教えこんで。そやから、日本語は上手ですわ、ここの女生徒はね。何度もこの女生徒の日本語劇を見せられましたかね、一回は見られる。しかし同じもん二回見たら、もう見られへん。かわいそうで、かわいそうで、猿芝居やらされてるみたいでね。もう少し教育の方法もあるやろが、と思うんやけども、それを口に出すと、内政干渉になるんでな。それから、同仁会の病院と研究所があつた。それが、あとから同仁会が苦しくなつて、善隣協会が引受けてやつとつたな。そこには、阪巻〔市雄〕<sup>(10)</sup>いうて、僕の高校での友達の医者が出てたし、今言うた戸田正三先生の養子、そういう人がおつた。

職員の宿舎があつたんやけど、もとの協会調査部が、善隣協会の第一宿舎になつて、研究所員が入つた。西北研究所は、本部の建物の中にあるから、ここから一里ほど歩い

て通うんです〔五八頁の地図参照〕。第一宿舍の川向かいに第三宿舍があって、本部の職員が住んでた。その東の並びに蒙古文化研究所がある。西側は、肅親王府ですわ、憲容・連絃の家や。今度の『月刊みんぱく』の「一九八六年」三月号に梅棹と金連絃の対談が載ってる。肅親王の財産を全部、民国政府が取り上げたわけやな。そしたところが、馬だけが残ったわけや。その何万頭という馬を管理する牧場事務所という名前で、肅親王の息子の憲容が管理して、一族を養うとったんや。その奥に、興蒙義塾というたか、蒙古人の学校があった。蒙疆学院というのは、蒙古政府の官吏養成所で、大境門の東にあって、そこを出たのが、東洋史の武田豊(12)と原八郎(13)。どっちも死んだ。そして、そのこの教官してたのが、人文から行ってた安達生恒。

張家口は、城が二つあって、大境門の中が、上の城、上堡や。その城の中にあつたか、外にあつたか覚えてないけど、グラウンドがあつた。城の正面が、城隍廟で、お祭りが盛大に行なわれた。察南政庁もすぐ傍。その後ろに徳王府、徳王の役所があつた。(14)この城は、下堡、下の城と比べると小さいが、その辺は、日本人に縁の少ない所です。

川の東の山の上に、蒙疆神社という大きいお宮さんがあ

って、僕ら毎月一日と一五日、土橋中将に引っ張られてここに参りに行くのやね。そうすと、回民女塾の卒業生が、見習事務員でいたが、それまで連れて行くのやね。そんなん具合悪い言うたら、女塾のオバハンにおこられて、そういう無理解な事から防ぐのが、あんたら研究員の役目やないか、ちゅうねん。日本の神さんにお参りして、おみきをいただく。一緒にイスラムの娘も。それで、あんたら、あれ、来ん方がええでと言うて、二、三回行っただけで、こっちが、陸軍中将が出張しておらん時に、総務部長あたりとかけ合うて、これはもう、参加ささん方がええと言うて。それから、協会でコンパして、酒飲んで、イスラムの娘も来るのやね。酒の肴にハムを出すさかい、そんな物、目の前で出したらいかんと言うたら、これブタやない、ハムでつせちゅうねん。ハムならええでしょうと。それが本部の課長やからね、そんな相手やから、もう、しんどい、しんどい。

経遠に、興蒙義塾という、中田善水(15)が塾長で、日本の中学出たやつをスカウトして来るのやね。あんまり出来の良くない豪傑、少々の事にこたえんような頑丈なやつばかり。その第二回か三回かの卒業生の、木村肥佐生(16)いうの、

ラマに化けてチベット行って。それからもう一人、西川一三。僕が行った時は、そういう若いのが二人潜入してるといふ事を聞いたですがね。その後、インド通って帰って来た。ああいうのが出たんは、興亜義塾というものも、成功したといふ事なんやろうかな。一人のやつは、向こうに入つて、住みついて、いづれ、日本軍が来る時、それを迎えるようにと言われたて、これ見たら書いてるねん『協史』二一四頁。例の小野田少尉、ああいう人のまだ見付らんやつが、いっばいおるのやろな、あちこちに消えたやつが。

それから、厚和に回民診療所というのがあって。これは、長野という日本の免状持たんお医者さんがやってはったんや。それでも、結構流行つてたがね。それから、包頭に善隣協会の出張所があって、協会の診療所があった。

調査部ていうのをいっぺん壊してね、西北研究所が出来て、後に、また調査部ていうのを作って、これに千田貞雄といふ中将が少将が、部長になって来たですわ。これは、攻城野戦むきの勇敢な下級士官といふタイプの軍人でね、将官といふ器ではなかつたな。あんなの下にいた兵隊は可哀想やと思うねえ。石田氏も、そっちを手伝え言われてた

けども、別にたいした仕事はなかつたらしい。加藤泰安は、研究所よりこっち専属みたいになつて、それで軍の参謀部へ行つて、その西北関係の資料を見て、それをまたこしらえてやる、といふ事で行つたら、軍の参謀部なんて、何も資料ないのや言うて、加藤があきれてきよつた。無い筈やねん。この年表見たらね、参謀部に西北調査班の出来たのは「昭和一八年八月、駐蒙軍に情報部編成」といふので『協史』四一七頁、前の年に出来たばかりなんや。そんなんで、その持つてる資料いうたら、旧調査部がこしらえた兵要地誌、聞き書きみたいな断片情報しかない。そういう貧弱なもんやつたですわ。

その前にね、実験牧場やら診療所やら、蒙古内地にいっぱい持つてたんですわ。それがこの本のこの地図『善隣協会史』表紙裏にあるのや。実験村やとか。さっきの包頭病院とか。年表みると、蒙古地帯の施設は全部善隣調査所に、善隣協会から切り離して移つて行くといふ具合に、善隣協会を二つに割つたんやね。それで、それが財団法人がなにかやつたんが、僕等の行った頃は、それが蒙古政府の機関になつたですわ。研究所のすぐ側に「蒙古善隣調査所」といふ大きな看板が出た。びっくりして、あれなんや言

うたら、元の調査部があっちへ移ったんやという説明やっただけども、これはつまり情報機関ですわ。蒙地へノコノコ行くのに、善隣協会いうてると、蒙古人に信用があるというんで、その名前保存しとったんや。皆さんからそれなんやという質問が出たんが、この蒙古善隣調査部が一つやな。

それから、蒙古文化研究所というのは、蒙古政府のたてた研究所で、所長が伊徳欽<sup>(16)</sup>で、主事が江実やった。これが、僕の居る頃に蒙古文化館と名前が変わった。居庸関調査のスポンサーが、この蒙古文化研究所ですわ。伊徳欽ちゅうのは、満洲蒙古で、日本語上手な人や。カラチン族出身というのは、一宮操子の関係でしょうかな、皆ものすごう日本語が上手なんやね、日本にちよっとも行ったこともないのに、びっくりするくらい日本語を喋りよる。

今言うてた蒙疆学院ちゅうのは、後に中央学院と名が変わった。これは、蒙古政府の官吏養成所で、これ卒業したら、官吏になるのやけども。

これが、まあ環境やね。

じゃ、今度歴史行きましょか。

到着が五月はじめて、四月まで東方文化で給料貰うて、五月から西北研究所の月給貰うたですわ。その前に森下が

先発隊で行ってね、これは早よから行ってね。研究所は昔の調査部の持ってた本をそっくり使えるから、かなりの分量の本があると聞いて、どの程度の本があるかと思て、僕が森下に葉書を書いて、十ほど見本を出して、返事、番号で書いてくれいうて、電報打ってもらて、そして十の内の七つくらいあって三つなかった。こんなもんなんかろうかと思て、色々あるかないかのボーダーラインになるような本を十ほど出したんです。と、その返事で大体見当ついたさかい、のうて困るような本だけを持っていった。今西さんが笑いよって、その後でそれ聞いて。どんな手紙を出したんや、番号だけの返事で分るちゅうのは、どういう選び方したんやいうのやけども、まあ僕は長いこと凶書掛してたさかい、そういうあるかないか分らん本を当たってみる、それも随分考えて書いたんやから。例えば『東洋歴史大辞典』の巻十あるかというような。『東洋歴史大辞典』はあるけど、巻十はないちゅう返事や。しかし、こっちのを持っていったら困るから、それは九まであったらまずええと。案外いろんなもんあったんでびっくりした。例の『ちくま』の対談があつて、今西さんが「あいつ、ぎょうさん本持って来よってな、そやけどそれをちよっと

も整理しよらへんのや」という話をしてる。

まあそんなんで、森下君が設営に行つて。宿舎は第一と第二があります。その割りふりをして、所員の月給も決めたわけや。そしたら、向こうは物価高で安い給料ではいけないというて、本部の職員よりずっと割高になった。そして、他の事務部門なんかもおさまらん。そういうことで、本部と喧嘩する役が森下君や。僕らが着いた頃は、森下君は本部のやつにもすごい評判悪い。日本ではそういう仕事、「先乗り」というのかなあ。ところが外国ではね、「役人に靴を投げる」という言葉があるねん。いっぺんイランとの何か共同調査の話をしてたら、テヘラン大学の先生が、よっしゃ、とにかくやつてこい、と。役人に靴を投げる役はワシが引受ける、言う。キョトンとしてたら、岩村「忍」さんが説明して、予算なんかのことで役人と喧嘩して、腹立てて靴を脱いで相手の頭をピシヤッとやる、それが「靴を投げる」という、まあそういう役割の仕事やという言葉なのやね。世界中、役人ちゅうのは、物分り悪い石頭ということになってるんでね。森下がその役で。

結局、僕ら着いた時に、研究所員には高い給料やるけれども、ボーナスはその代わりやらんということになってた。

そやけど、結局貰いました。ところが、その頃は日に日に物価が上がってきとつて、善隣協会ちゅうのは、日本政府の助成団体やから、円の値打ちが下がったからいうて、それだけ予算は増えんわけや。蒙古政府もやっぱり円の値打ちが下がると、蒙銀券、これは円とリンクしてる、円とパナんやけど、役人の給料なんかは、手当てごまかすのやね。「津貼」というて、冬の石炭津貼とか通勤手当とか、いろんな手当を出してごまかしてた。現地の会社なんかは、もうその時分からスライド方式で、物価がなんぼ上がったら月給なんぼという、そういうのが一番対応が早い。蒙古政府がその次。日本政府はズーッと遅れる。これは最後に分ったことやけど、教育召集やら防衛召集で兵隊に行つた時、軍人軍属ちゅうのは完全に日本の給料。僕らが最後は三千元かそこら給料貰ろてた。その時に、百円とか、少尉なんか九十円とか、それに前線手当てかなんとか。軍人軍属というのは、そのかわり米から野菜から、そんなもん全部現物支給ですわ。タバコまで。しかし、その、一人の生活費三千元のところで、百円や百五十円で暮らすというのやさかい、そら塀や濠で困んだ中でしか暮らせん仕組みになってる。大使館系ちゅうのは、その次にしんどいなにや

ったな。

着いてすぐに、何もない所に研究所こしらえるのやら、文科と理科に分けて、その編成をやつて、研究所の内規作りとか、毎日会議ばかりしてたですわ。ひと月経つか経たんうちに、民族研究所との共同調査いうので、イスラム調査。民研の一行は六月に着いたと思うな。岩村、小野〔怒〕、佐口〔透〕の三人、岩村さんが大将で。で、回民調査いうのやつたです。それが八月までかかったかな。西北研究所から僕と野村と甲田。それから民研の臨時の手伝いで、東亜研究所の川西〔正己〕と、ほか、尾崎というお医者さんが、その時分厚生省やなかったが、後で厚生省に入ったんですがね、それがメンバーです。

これは佐口君がこしらえた質問、一冊のパンフレットになつてゐる。それを通訳に読まして、答をカードに書いて、二人一組になつて。たとえば、僕と小野君が組になることが多かった。野村・川西で組になつて、甲田・佐口で。最初、張家口のイスラムの寺々を調査した。張家口のイスラムの寺はね、新民大街、ここに大きな寺があるんです。新民大街というのは蒙古政府がつけた名前前で、本来は黒韃子溝という。蒙古政府は、こういう名前好かんのや。それか

ら、本部のあたりと回民女塾のあたりが回民のあつまりですわ。要するに、旧城の外側に、城内に住まずに、城外に住んでいた。もう一つは川の東、土爾溝にあつて。本部の近くのイスラムの寺で、一日に五回、礼拝の時間にはポコポコ、ポコポコ、柳子（ウズン）という木魚みたいなもん叩きよるねん。その音、研究所まで聞こえて来るでんすわ。当直の晩なんか、夜遅うによう聞こえてくる。

もう一つ言いますとね、川の西側に旧城が二つある。これは旧市街ですわね。これは漢人、山西方言なんです。ところが川から東はね、鉄道がついてからは、北京の東の京東人という通州あたりから移住して来た連中でね、川を渡ると北京方言。それから、大境門出るともう一つ変わるというのやけどね、山西の田舎言葉になるのや。北京語やと「張家口」はジャンジャコウやろ、山西方言ではジョジャキューちゅうねん。それで、宿舎のある所は「西溝」シーゴウいうけど、これをシーギューちゅうねん。本部のある「隆昌巷」ロンチャンシャンいうのは、山西方言でローチャウハーン。そういうことで、張家口は三つの方言がそれぞれあるんですわ。

日本人が沢山住んでたんは、町の東の小学校や中学校の

あるあたり。これが日本人のいる地区で、政府の宿舍やなんかがあつて。僕らは元宝山あたりで、晩になると狼の声が聞こえて来るんですわ。そこからこの研究所まで、かなりの距離あるから、往復していると、日本人とは割合に縁の少ない暮しをしてるんですね。

それから調査のことやが、このクエスチョネア、ある答えが出るように、予期した質問状やからね。佐口が張り切つて作つたなんやけども。佐口いうのも東洋史学者で。調査の結論は『社会構成史体系』に、岩村さん書いとんね。<sup>(19)</sup>

この調査での一つの問題はね、漢人イスラムは漢人であるか、回民というのは民族であるか宗教であるか、ということ。同じ漢人の内の、日本人の内にキリスト教徒も仏教徒もおるように、漢人の内にイスラムもいる。

それがなんで大事かといふとね、中華民国はイスラムをただ宗教としてた。漢人として扱つてたわけや。ところがこの蒙古政府は、民族として扱つてた。漢人として扱うと困るんです。こういう城の中心は城隍廟です、或いは関帝廟です。県公署は関帝廟の中にあるのや。その関帝廟の祭は、すなわち市民の祭なんや。そこから市民全部が、その費用を負担するわけですよ。そうすとイスラムでも関帝廟

の祭、割前出して役を負担せんならん。民族やったら、これは無関係いふことで、知らん顔できるのや。満洲国はどうやったかな。満洲国も民族ではなかつたと思う。蒙古政府が初めてこれを民族とした。今の中華人民共和国は、民族ですよ。大学の中にも回民食堂いうのがありますわな。

回民自体としては、民族として扱つてもらう方が工合ええのやないですか。『月刊みんぱく』の金運祉の話でも、今まで満洲族は満洲族といわずに漢族というてた。満洲族の子孫であること隠してたけども、最近三年ほどで人口が二百万から四百万に増えたちゆうねん。人間が増えたんやなしに、統計が増えたんや。今の政府の少数民族政策で、満洲族という方がいろいろ得ることがあるさかい。たとえば大学入学生に、漢族何人に少数民族何人という割当であるやろ。満族という方が通りやすいわけやね。そういうことで、三年間に二倍以上に増えたと書いてある。今まで黙つてたやつが、満族やて言いだした。

岩村さんあたりは、元の時代に西から入つてきたのが、中国人に同化したという、そういう仮説を持つとるのやな。その前の石田さんの調査でも、いろいろ写真をとつたり、骨格調べたりね。この尾崎いふお医者さん来たのも、



體質人類学で系統出そうということです。こりや顔どう見ても漢人ですわ。聞いてみるとね、漢人やけども宗教だけ違ふのやという返事するのは、張家口の下町とか大同なんかは大体そうや。ところが張家口の黒韃子溝とかね、ぎょうさん集まつてる所はね、民族が違うと言う。民族がなんやということは分らへんのやけど、とにかく宗教だけの問題やない、言うて頑張りよんのやな。ここを終りまして、イスラム調査は大同に行った。大同のイスラム教徒は、街の西南にかたまつてる。このイスラム調査やと、裕福なのはイスラム料理屋をやつとる連中が多い。羊と牛肉のね、そこで御馳走になるんでね。いっぺん大同のイスラム料理で、そこへ時間があつて行つた。誰か遅れて来て、来よらんから、宿屋へ電話かけて、我々そこ行つてるから来てくれと言つた。屋号を「馬金荘」という。その字を説明したら、女中が笑いよつて、笑いよつて。よう考えてみたら、なるほどこれは笑う筈や。「マーチンユイ」ではちよつともおかしなわけでもね、玉二つ並んだある言うたらもう。

開拓地へ出て行くと、イスラムはイスラムだけで村作るわけですわ。大同から五里かそこら行つた郊外に、「馬家会」という、会というのは村で。村中イスラムいるいう

て、なにかそれがね、日本へ伝わつて大げさな伝説になつてね。行つてみたら、そらそういう所へ新しい開拓民が行つて、イスラムだけで一つの村作つてるのであつてね、変わったことないのやけども。大同行つて、それからフフホト「呼和浩特」ですわ、その時分、厚和言つた。そしたらこは、ものすごいイスラム人多いんでね。張家口も多かったけども、城外はもうそっくりイスラムですわ。ほんでイザコザも多いのやね。それから包頭、あとで宣化と。そういうことでは、八月頃それ終つたかな。俄かに寄せ集めたチームで、メンバーの経歴もまちまちやから、なかなか調子は合わなんだけど、見聞だけは、大いに広めることができ

た。

九月から今西さんたちは、遊牧社会の調査に出た。シリングルをずーっと北へ行つて、外蒙との国境そいに牛車で歩く。

原山 今西先生の論文に、コースを書いた地図がありません。<sup>20</sup>ダリガンガの方へ行くのですわ。

藤枝 この時に出かけるまでに、準備研究会を所内でしよつちゅうやつたですわ。皆さんのね、いろんな題目が出てるわけやね。梅棹の題目がね、「直翅類昆虫の分布」と

いうことやったんや。つまりバッタ、キリギリスです。これ牧業と何の関係あるのや言うて、僕尋ねたんです。そしてたら感心したね、その答に。バッタちゆうのはね、草食うて生きてる。ある種類の草に対して、ある種類のバッタ。どこにどんな草が生えるかという事は、その土質・湿度・雨量、その他もろもろの総合した結果が、草の種類、それがそのままバッタの種類になると言うのやね。それ聞いて僕は感心してね、行く前からそういうことで、いろいろ感心してたんや。僕らはね、一緒のトラックに乗って張北まで行ってね、張北とドロンノールのイスラム調査を西北研究所だけで、というか、甲田君と僕の二人でやったんや。これまた感心しましたな、ドロンというのは。蒙古草原は、まあ漢人がずーっと農地化して。河北あるいは満洲から来たやつは東、西の方へ行くと山西の方から来たやつ。それぞれの村が、山西方言と河北・山東方言を残してるわけやけど。所々でこう、河北が西へ行って、山西が東へ行ったりする。ドロンの町は、その二系統のぶつかる所やね。イスラムの寺も、南寺・北寺と二つあって。イスラムは、ラクダ曳きやら毛糸つくりとか何とかやとる。その時、土橋中将も僕らと一緒にドロンまで行って、そこから

一緒に帰った。今西さんたちは、張北から牛車でずーっと、また北へ行ったんやね。

ドロン・ノールは、ちょうど満洲国との境でね。張家口へ行くよりは、満洲国の方が連絡ええ所やねん。善隣協会の出発点なんや。そこで僕が考えたんはね、張家口から歩いて五日か六日でドロンまで行けるわけです。万一張家口が危のうなったらね、ドロンまで歩いて、満洲国へ入ったらもって安全であろうと。万一の時、歩いて逃げる覚悟してたらね、終戦の時はソ連軍が八月十日頃ドロンから張家口へ攻めて来た。逃げるそこあらへんのや。張家口でもしょっちゆうそんな話しとってね。いざという時はドロンに逃げたらええ言うて。梅棹の嫁さんに、あんたイザという時は汽車で北京行くつもりか、日本負けた時は汽車なんか動かへんで、北京行ったら捕虜になるだけや、言うてね。その時、愕然としよったな、梅棹夫人は。その時は、ドロンまで歩いて満洲国に行ったら、満洲国の方が日本の勢力強いと、朝鮮はさらに強いと、こう僕らは思ってたからね。それが、逆の方から波が来たんや。しょっちゆう、どういう時はどこへ逃げよう、ということばかり考えてた、ああいふ所におると。しかし、それをね、おおっぴらには言

えないのや。研究所の中では話しても、本部のやつとはそんな相談できんのか。もつとも本部かてそやね、内心はね。加藤泰安の当番兵ちゆうのか、従卒やったか、それが雇うてくれ言うて来よつたんや。で、本部の事務員しとつた。そしたらね、着いたばかりで勇ましいわな。本部の古参の事務員の一人に向つて、「おまえは、イザとなつたら蒙疆の土になる覚悟か」とそいつが言うたら、古参の方は、「トンデモネエ」言うてね、「そんなことしたら御先祖様に申し訳ねえ、ちゆうねん。それも内輪でだけやつたらはつきり言えるのや、そういうことはね。まあ、それは行く前から考えていて、向うに行くのにも、東方文化の籍を残して出向で行つたといふのも、つぶれて逃げて帰る時のことを考えてやからね。あとから、持つて行かなんた本を片付けたら、大事な本、持つて行つたように見えて、実はかなり考えて、大事な本は置いとるわ。

原山 回民女塾の是永俊子談として、石田英一郎さんが、女生徒の頭のサイズを測りに来たという話がありますか  
『協会史』一九五頁」、それは西北研究所時代の話ですか。

藤枝 その前や。

原山 その前に東大から行かれた時の話ですか。

藤枝 うん。頭の寸法測つたり、体質人類学を色々やるのは、民族的に西から移住して来たやつが、中国語を話すようになったという、そういう考えや。そういうやつもあるのやで。アラビアから、なんかアホンが一人流れてきてね、張家口に居ついとるわけや。そしたら、岩村さん、そういうこと知らんで、どう見てもアラビア人ちゆう顔したやつがおつて、それが、その連中の中に座つて、ちょっとも違和感がない、言うた。他のやつも不思議そうな顔せん、と感心してた。厚和、包頭あたりのやつは、そういう具合に、彼等自身が考えてるのが、多いいたいやな。中国人とはスジが違ふという。

今西さんの一行が行つてる間、研究所は次長がおつたわけやね、その次長がなんか頼りないのや。城隍廟のすぐ前で、いっぺんお祭りに出くわした。あのへんの神さん、皆、正何位とか従何位とか、位持つとるわ。その神像を先頭にたてて、行列するのやね。オモロイ、オモロイ、これのお祭りや言うてたら、石田先生はね、ハンカチを出して、ホコリでたまらぬ顔して、鼻を覆うわけや。あれで人類学の研究出来るのかいな言うて、甲田君と笑ろつたんやけども。黄土地帯やからね、乾くとね、細かい砂がね、

靴のクルブシくらいまで、ゴボツとくるわけですわ。兵隊靴を履いてるのやけども、それでも、帰ったら、ホコリだらげやね。そういう所で、石田先生はね、ピカピカに靴を磨いてね、晩はね、型にはめて。宿舎を出て、五歩歩いたら、もう膝までホコリだらけになるのがね。あのへんは、ちよっと神経分らなんだな。

蒙古政府との応対やなんか、肝腎な事になると、なんやのんびりしてしもてね。だいたい、はつきり言うて、向こうに居てる日本人も、質悪いですわ。満洲国には、まだ割合に優秀な人材が行つとったけども、北京まで来ると、だいぶ日本人の質が落ちる。蒙疆まで来たら、もう一つ質が落ちるわけや。そんなのを相手にするのやさかい、石田さんでは、上品すぎて気の毒でね。探検隊が出てると、何月何日どこへ米持つて来いとか、なんやら持つて来いとかいうリストが有って、それを派遣するのが、なんか僕の責任やつたみたいになってたんやけどな。それも、誰かちゃんとやってくれる人がおつて、僕はそういう心配はあまりせなんだと思うのやけども。

あとから、今西さん帰つて来て、さっきのその勇ましい従卒とね、もう一人興亜義塾出た若い小僧と二人が、食糧

なんか持つて補給に行きよつたんやけどね、「あの時困つたで」と今西さん言うねん。二人がこのまま探検に連れて行つてくれ、張家口に帰りとうない、言いよつて、動きよらへんねん、言うて。そういうことのと、二月に帰つて来た。と、その年はね、日本が占領して八年目で、初めての寒さやちゆうねん。それまでは、だいたい蒙古は寒いのに、あんまり寒くなかつたんが、一月二五日に大雪が降つて、降つたら、温度が零度より上がらへんさかいね、そのまま凍つてしまふねん。雪かきなんてこと、しゃへんさかい、道でツルツとこけてね。そやから、奥地の方はもう一つ大変なんや。それをまあ戻つて来て、報告講演会をしたんや。

そこで、まあ僕が真先に驚いてね。だいたい、探検隊の結論ちゆうのは、行く前からね、今西さんは言うつたんや。それまでは、牧業調査いうたら、獣医さんの調査ばかりで、口を開けば品種改良やね。如何にして、毛のぎょうさん採れる羊に変えたらええかて、ところが、そういうやつは災害に弱いのが、毛の多いやつはね。そやから、初めからそれ考えて、収量は少のうても強いのを飼うてるわけや。日本から来たばかりの獣医さん、それ知らんさか

い、非常に効率の悪い牧業やっていると、こう思ってるわけや。それで、品種改良したら、みな死なしてしまうわけや。獣医さんの牧畜、品種改良とは違う結果を、ワシ等出して来ます、言うて。行く前から大きい口ききよるなと思てたら、そしたら、戻って来たらやね、その結論は、牧畜いうたら、有蹄類の、つまり家畜の社会と、人間の家族並びに家族を中心とした人間社会との結びつきである。家畜の群というのは、家畜は群単位に行動するわけやが、人間がその後ついて行くだけや、ちゅうのや。そのシンピオシス「共棲体」や、ちゅうわけや。家畜の群ちゅうのは、草に左右されて、文字通り水草を逐うて、ほついても、一日か、一シーズンかに、8の字形の行動をするちゅうねん。それを管理するのが人間であると。そういうことを中心にして、全員がなんか報告したけど、こっちはそういうなにな、びっくりしたな。京都に帰ってから僕は、秋田屋から出た『知慧』という雑誌の一〇号に「遊牧文化圏」という文を書いた。

それで、それが二月に帰って来て、三月四月、水が溶けはじめてね。水が溶けはじめると、今度は、教育召集がはじまったんや。まず、甲田君が三週間か五週間か、大同へ

行ったわ。軍の方針は、在留日本人の全部を教育召集して、兵隊に役に立つようにするというので、三週間か五週間ごとに、入れ替わり立ち替わりこうやっていて。僕は六月頃当たったんやな。それは今西エクスペディションがね、冬にシリントン縦断したのと同じコース、夏にもういっぺん歩くちゅうねん。今までの、京城大学の調査も、京都大学の調査も、夏の、学校の夏休みでその土地の旅行しやすい時に、さあつと行くだけやったんや。冬、誰も歩いてへんちゅうのや。それで、同じ所を、夏もういっぺん行く言うて。その出発の時に、篠田統さん、北京の防疫隊長やって、大佐待遇や、それが、兵隊五、六人連れてやって来て、今西・篠田合同エクスペディションや。大佐が一人付いて行くと、強いですわ。そしたらその日に、僕に教育召集来て、何週間やったかな、五週間やなかったかな。僕は張家口守備隊に入ったんや。さあ、それ済んで、帰ろうとしたら、なかなか帰してくれへんのや。参謀部から除隊命令が来やへんちゅうねん。そらね、二十年の七月やから、すぐ傍まで、共産軍来とるわけですわ。それで、僕等除隊したら、本職の兵隊で、僅か数十人しかおらへんねん。張家口守りきれへんわけや。二、三日したら、また新しい

の入って来るのやけどね。隊長は手放すのをしぶっとったわけや。それでも最後に、午後おそくになって帰してくれた。喜び勇んで帰って来たらね、ちょうど、今西・篠田合同エクスペディションは、それ終つて、帰つて来てね、研究所の中庭で荷ほどきしとるところや。アホらしてね、皆折角旅行しとんのに、ワシ一人はその間、兵隊行つてたと思つて、アホらして。召集中に藪掘つてたら、その辺に生えてる雑草が全部甘草やつた、と話して、篠田さんに案内しようか言うたら、ああ是非見たい言うて、除隊したあくる日に、陸軍大佐の旗つけた車で、バアーツと行つた。そして、きのうまでこつちを怒鳴りつけてたやつが門番しとるねん。捧げ銃しとる前通つてな、妙な顔しとるねん。ほんで、甘草採集して、いくらか鬱憤晴らしてね。

そしたら、間もなく八月。その頃にはね、色々情報が入つてきて、外蒙の兵隊が内蒙軍の服着てウロウロしてんのが捕まった、とかね。そういう情報を、長田〔夏樹〕が言うてきた。彼は、蒙古文化館におつて、江実が主事で、所員で長田がおつたんや。それが江さんと折れ合わんで、シリングル盟の方へ出とつたんや。長田にパタッと出会うたら、エライ事になつたあんのやぞ言うて、ちょうどその

報告持つて、とんで来よつたんや。そしたら、もう戦車がドロンへ入つてきたという。張家口中の男が、全部防衛召集になった。この間までおつた部隊に、またもつていかれて。今西さんは、大隊副官や。今西さんは、工兵少尉やから副官や。防衛召集は、八月十日すぎてからやな。終戦の詔勅ちゆうのは、貨物廠で聞いた。

民族研究所の岩村・江上は、満洲国まで来て、様子を見とつたんや。向こうまで行つたら危ないいうので、それで、ギリギリに安東県の国境越えて、朝鮮に入つて、岩村さんは、タバコをぎょうさん仕入れてて、それを旅費にして、密航して日本に帰つて来たちゆうねん。僕かて、米を持ったら重たいさかい、米に代わるもので、紙幣が通用せなんだらいうんで、砂糖をいっぱい持つたな。洋服が、背広がないのに気がついたら、最後の引揚げの時に。ネクタイ十本程有つて、服無しでネクタイの十本も持つて行つたら、あとで北京へ行つて、アイツよっぽどあわててたと、笑われるやろ思つて、それ全部ほかしたら、洋服の方は、梅棹が洗濯屋から取つてきてくれとつてん。それで、またネクタイ半分拾うて。これは、しかし、ショックキングなものやつたねえ。貨物廠で寝てたら、朝からバリバリと機銃掃射に來

よるのや、ソ連機が。寝てたから知らんねん、音だけ聞いたんや、飛行機の姿は見てない。翌日また、飛行機がこう飛んどるのや。あーっと思たら、ポロツと黒いもん落としてよったんや。それは、政府狙ろたんやね。善隣協会のボーイが、それで爆死しよったんや。

原山 今西先生の「私の履歴書」<sup>(註)</sup>に、北京に行く時に、先生でしたか、梅棹先生でしたか、軍服姿では具合が悪いというので、慌てて背広を借りてきたという話が載ってますね。

藤枝 軍服やない。僕は国民服や。ああいう、カーキ色の服やったけど。背広は、夏冬二つ寝袋に入れてかついで行った。そしたらね、「徳王公司」、明日は解散やそうや、という噂が流れた。在留の日本人は、蒙古政府とは言わずに、「徳王公司」言うよったんや。そしたらね、小隊長が「そら大変や。政府関係者は明日皆行ってこい」言うて。朝起きて皆行きよったんやね。昼頃になったら、皆三ヶ月分の給料貰ろて帰ってきよった。連中が出かけると、政府の辺からパーッと黒煙があがったんや。書類を焼いとるのや。政府や大使館の方からね。アーツ、これ本当やったんやな、ちゅうわけや。一国の政府が、そういう具合にあえなくつ

ぶれるのをね、こう見とってね。

その晩に集まれ言うて、並んだら、僕はトップにおったんや。主計少尉が、「そこにスイッチあるから灯いつけ」ちゅうて、言われて行ったら、なるほどスイッチがある。貨物廠で、そこに貨車の引込線があるのや。皆塩を積んどるねん。それを全部下ろせちゅうねん。下ろして空にして、それが駅に行くのやね。あくる日の朝、夕方までに日本人は、荷物二つだけ持って、駅に集まれちゅうのや。それから慌てて家に帰ったら、梅棹はあれ現役やから召集あらへんねん。現役の戦車兵や。研究室を片づけたり、洗濯屋行って所員の物を全部取って来たり、いろいろそういう後始末やとって、僕も持てるだけの物で駅へ行った。貨車五列車、それへ在留日本人全部積んで。それが二十日や、八月の。二十日に集って、二一日の夜明けに出発したんや。

原山 今西先生の回想記<sup>(註)</sup>では八月二一日の正午過ぎに汽車で張家口を発った、とあります。

藤枝 それ、一番遅い汽車やないかな。日本人出たあとに略奪や。略奪と放火やね。それで、その日の九時に城を明け渡すというて。外蒙古軍とソ連軍は野狐嶺へ来とる。そこはね、張家口の「口」と言うのはそれなんですわ。そこ

しかね、蒙古へ行く「口」はないわけや。僕が涿鹿行つたらね、その回民の家のおばあさんがね「口コウから来なすつたか」と言うて。その娘が説明してくれて「口」と言うのが分つた。厚和は「西口シゴウ」である。なるほど行ってみたら、そこ以外は通路はないわけや。「西口」から入ると陝西へ行くわけや。張家口、「東口トウコウ」は河北へ通ずる。

後で聞いたら、一晚のうちに、在留邦人は五万人といわれてたけど、それが全部集まって。九時になつても、白旗全然あがらない。ソ連軍、どないしたんや、どないしたんや言うて躊躇しとつたんや。そして張家口に入つたら日本人一人もおらへんねん。残つてた人は、捨て子と病人だけや。北京まで五日かかったわ。兵隊さんたちは、歩いたり走ったりして逃げたそうや、北京までね。これはね、世界の戦史に残る見事な退却やそうや。退却するのはむづかしいものや。下手に退却すると捕まうて。

原山 ソ連軍が外長城線の所でピタリと止つていた、<sup>(23)</sup>と  
いうのは。

藤枝 本職の兵隊がそこにおるもん。今の野狐嶺ね、山砲が三つあつたら機甲化部隊でも来れへんもん。野狐嶺い  
うのは凄いいんでっせ。こっちから行くのも、あっちから

来るのも、そら。むやみに来たら、怖いと思うねえ。どんな仕掛があるか分らへんさかい。そういうことで、書いた物は何もないわけですわ。今西さんは、それから北京に残つていろいろ書いてね。

原山 二十年のことに話戻りますが、飯塚浩二先生が行かれたでしょう。

藤枝 それね、今ここで話し漏らしたことはね、江上・磯野グループ、これが夏にはくら回民調査やつてる頃に、シリングルへ行つて、それでそのあと冬にもういっぺん行つたんや。<sup>(24)</sup>それで、その時は江上さんは来んで、その次の年また来て、磯野と一緒に行くとうして。そしてその間にね、いろんな人がやつて来て。一番先にやつて来た人は、人文研の木村英一さんなや。五月、僕が着いて、バタバタして、一週間目にヘトヘトになつて、まだ布団が着かんで、宿舎で寝袋で寝とつたんや。そこへ木村さん来て、無理したらあかんで、言うて。木村さん来たんはね、中江文庫、人文に今ある、それを引き取りに来たんや。中にマルキシズムの本があるから、日本でそれをチェックせんように、税関をそっくり通すようにね。その引き取りに来て、ほんで張家口まで脚を伸ばさばつたんや。その次には、水



野〔清一〕・長広〔敏雄〕グループが、七月から大同の雲岡の調査に行つて、行きしな張家口に寄つて、帰りにももういっぺん寄つていって、その時に写真師の羽館〔易〕さんは大境門の宿舎に二、三日泊まつて行つた。それからも一つ、秋になつて江上さんが戻つて来た。そこで「梅棹事件」ちゆうのが起こるのやけど。

それから、北京の華北総合研究所に居つた神尾〔明正〕、それが来てね、京大の地理出た人や。そのあとね、また僕は神尾のとこへ、北京へ遊びに行つた。そしたらね、北京には哈密館ちゆうもんがあるねん。哈密からの使節が泊まる、つまり哈密国の公使館やね。そこにウイグル人、何人か住んどるねん。そこへ僕、数日泊まつたですわ。ウイグルの一人は、毎日午後三時かなんかになると、放送局に用事がある言うて、そこで月給貰てるさかい言うて、スツと行きよんね。なんやと思たら、向こうの放送聞いとるのやね。それを速記するのやね。西北研究所いうのは、前の調査部からのなにて、いろいろ情報機関から狙われてね、うちへ来ては、回民の動向とかなんとかを聞きに来よんねん、いろんな調査部から。しかし哈密館に泊まつたのは面白かつたな。ウイグル語、フとプと一緒にやろ、僕をプジェ

ダさんちゆうねん。フの音がないのや。ウイグル語にな。

そして、年が明けてから来たんが飯塚浩二やねん。あれは、家が焼けたんか。それで、終戦前夜のさういうところの日本人が、どんな顔しとるかと思つて見に来た、言うつたわ。こっちは、終戦前夜の日本人はどないしとるのやろと思つたら、飯塚浩二が青なつてやつて来よつて、かなり長いこと泊まつつたんや。

そんでね、歴史としてはそんだけなんやけどな。それでぼくら引き揚げ列車に乗つた時はね、まだ召集解除になつてない。日本人の護衛やいうて、鉄砲持たされたわ。その鉄砲、五日後に天津の駅で渡して、そこで召集解除や。いくつかの日本人小学校が難民収容所になつた。

原山 先生は、そうすると、張家口から天津まで行かれたわけですか。

藤枝 うん。

原山 今西先生は、北京で降りはつたそうすね。

藤枝 加藤泰安が迎えに来ていて抜けたわけやな。梅棹は、天津から呼び寄せられて行つた。梅棹は、天津でチブスになりよつて、収容所で。

蒙古政府の話しまひよか。

昭和一二年に、察南、晋北、蒙古三つの自治政府が、それぞれ出来て、つまり蘆溝橋事件が起こったらすぐ。その三つを合体して、蒙疆連合委員会というのが出来て、これが、張家口やないかな。そうすとね、それが蒙古連合自治政府になって、そうして、さらに、蒙古自治邦という呼び名を作って、何時頃から使うたか知らんけど、一八年に行つた時にはもう中では、これ使ってた。一八年、一九年はね、自治邦というのは、中だけの呼び名で、そして、外に對しては、連合自治政府やったんや。ところがね、張家口へついで、民団と領事館、民団の方やったかな、在留届を出す、住所はね、「中華民國察哈爾省張家口市」や、日本政府機關は、正式にはそう言うとするねん。ところが、その頃は、それまでは山西省・察哈爾省言うてたんが、内政部關係は、昔の察南の方は、宣化省となつて、これは宣化に省の役所があつて、その省次長が、森一郎や、東洋史の僕の一年さき、こないだ死んだ。それから、山西省の北、はじめの晋北自治政府は大同省、それから、蒙地の方は盟が、

察哈爾盟、錫林格勒盟、伊克昭盟  
巴彥塔拉盟、烏蘭察布盟

と、これだけあつてね。

政府には、内政部と興蒙委員会と、もうひとつ回教委員會とというのがあつて、そこに、特産課というのが必ずある。それは、アヘンや。アヘンを専売にしてるんです。山奥の方に、ものすごいケシ畑があつてね。それで蒙古政府の財政もつたし、終戦頃は、北京の聯銀券と蒙銀券とは、三對一位の比率やつたかな。つまり蒙古の方が輸出超過になつて、値打ちが高いんです。例えば、茶を買うとね、湖南省産の茶が、北京の三分の一か四分の一の値段で張家口で買えるのや。その時分はそれ程分らんだけども、例えば、サイパン陥落というと、物価がどつと上がるんや。円が下がつて、卵の値段、南京豆の値段。

そうしてね、その蒙古政府ちゆうのは、驚いたことにはね、それだけ広いけれども、人口から言うとね、漢人が七百万おるわけやな、それから回民が七十万位か、蒙古人は十万おるかおらんかやねん、実数五万位やないかと言つてた。それでいてね、蒙古連合自治政府でね、蒙古人が主なんや。元代のね、蒙古、色目、漢人というのと一緒なんや。僕が着いた時に、さつきも言うた総務部長の上西園はね、こんなアホなことがあるか、ちゆうねん。かれは東亞

同文書院出とって、中国語、僕よりうまいねん。七百万の漢人ちゅうのは無視されとるやないかと。しかし、こしらえたやつは、元朝の制度を知って作ったんやないと思うのやけど。つまりね、日本政府は、日本軍は、ドロンからこう入って来たからね、草原地帯だけでは食えんから、漢人地帯を入れて、漢人地帯と言うけども、草原のすぐ南側は、もともと蒙地やったとこを漢人がどんどん進出していつて、農地にしたんやからね。

そうすと、ややこしいのは、その官吏なんです。日系と現地系とあるわけなんです。その政府の一番主体はね、満洲国派遣のやつや。蒙古政府に勤めとってね、満洲国に履歴書カードがあるわけや。定期昇給ね、高等官何等とか、その辞令は満洲国から来るねん。じつとじつとでもね、満洲国の辞令で給料が上がって行きよるねん。それから、日本政府派遣があるわけや、官吏の中にはね。それから、現地採用と。一番いばってるのは、満洲国派遣や。つまり、満洲国の出店みたいな形で出来とるわけや。イザコザ起して、具合悪なると、すぐに満洲国が呼び戻して、割愛状ちゅうのを送って。同じ事は、現地系にもあるのや。蒙古人の熱河蒙古の、一宮操子の行ってたカラチン族、これは

日本語うまいのや、皆。蒙古人やと聞いたら、びつくりするのや。同じカーキ色の服着とったら、分らへんねん。そいつらが、日本語の分るのが、一番上におるわけや。それから、漢人かて、若干采とるんやね。皆、給料違うんですよ、給料体系が。僕らが着いた頃、蒙疆という言葉は、蒙疆銀行と、その他若干の会社に残ってるだけで、鉄道は、華北交通で、これは満鉄の子会社で満鉄派遣と、日本の鉄道省派遣と両方で。それ全部、日本の国鉄が戦後引取った。それでいて、居留届を出す時は「中華民国察哈爾省張家口市」、蒙古政府の書類出す時は、「蒙古自治邦宣化省張家口市」や。蒙古政府の官吏は、日本の機関では「蒙古政府職員」と呼んでた。

原山 蒙古側で出す正式の公文書にも、蒙古自治邦となつてゐるわけですか。

藤枝 野紙ね、蒙古自治邦と書いてある。その辺が、どかがどうしてどうなってるのか分らへん。こんなこと、おかしいやないか、と言うとね、すぐに内政干渉なんです。特に、西北研究所あたりが、そういうことおっぴらに言うかね、すぐに政府から反撃が来るねん。ほんで、特にね、こうやって戦争が末期で、こう何かおかしくなつてく

るわけや。

政府のもう一つのなにはね、各役所の長は、必ず現地人なんです。次長が日本人や。盟の場合は、盟長と参事官や、森一郎<sup>(26)</sup>は、察哈爾盟参事官から、宣化省次長にかわつとる。日系としては、最高の地位まで行つた。もう一つ上に、最高顧問というのがあるのやけど、それは、もうとつくに無くなつた。政府の総務部長位が、最高やつたんや。そういう建前と実質と、色々ややこしいてね。江さんにバタツと大境門の前で会うたんや、研究所とちゃう方へ行きよる。あんたどこへ行くねん、言うたら、これから中央学院に、四月に来たばっかりの新しい官吏候補生の教育に講師に行くのや、なに講義するのや言うたら、「蒙古自治邦」という題やちゆうねん。「自治邦の歴史」かいいうたら、「歴史だけやない、『自治邦』という題で講義するのや、何日間か講義するのや」て。何日間も講義する事あるのかいなどと思たら、こういう事を言い出したらね、それを内から言い出したらね、そら新任官吏のために、数日間の講義が必要であるわけですわ。

大使館の大將は、公使なんや、それは軍人なんや、司令官とは別の軍人が来る。以下の役人は全部、外務省出身で

ね、その頃は、大東亜省になってたけども、皆、外務省で教育されてて。例えば、宴会の席次なんて、僕は、そのの書記生から教えてもらたわけや。その他マナーの類は。その書記生の、年五十位になって書記生のままや、東京でそういうことばかりやってたんやろな、詳しいね。僕は、もう、その時の教育、大いに役に立つとるねん。

研究所が出来た時、政府の遠来荘という建物で、向こうの政府と軍なんかのえらいさんを、ずらつと呼んで、設立披露宴をやつたが、政府の人は来ようとせんのか、えらいさんは。司令官来んだけど、参謀長が来て、参謀長は大いに研究所を持上げてくれて、大使館の人は、文化部は大喜びや。文化部長というのは文部省出向や、その前の年にね、文化部長は、一生懸命研究所設立に尽力して、その分だけ蒙古政府と仲悪なつたんや。そやから蒙古政府の人は、曾我非文化部長と呼んどつた<sup>(27)</sup>。そんなことで、研究所ができる頃にはもう東京へ戻つとつて、戦後は岡山大学の事務局長になつた。まあ、そういう非常にややこしい。

それとね、旗には旗長、ジャサク、がおるわけや、日本人は顧問や。顧問ちゆうのは、行つた初めは、日本人の物差を蒙古人に強制しようとして、大いに摩擦を起こしたん

や。そのうちに、だんだん向こうの物差が分つてきて、物差の修正をやるわけや。そうすと、今度はね、日本の軍なんかの方針と物差がズれてくるわけや。その場合に、旗願問級ちゆうのはね、申し合わせたように、のきなみ日本政府の方針に反抗してね。蒙古民族の立場で日本政府とケンカするようになった。それは、えらいもんやったでっせ、日本人顧問の熱意ちゆうのは。本気になってね、日本政府とケンカしよんのや、そういう時期になってたです。それならね、蒙古人の内心は、漢人の支配から抜け出て、蒙古人だけの国を作ろうと、そうすと、蒙古人だけで経済力充分でないのが、その七百万の漢人の経済力で、一つの国になったんやからね。徳王としては大成功なんです。

原山 やっぱり、「徳王公司」ですね。

藤枝 そういう何はね、今の引揚げ連中がね、蒙古政府の引揚げは、「らくだ会」というのを組織して、善隣協会は、「善隣会」という風に、その他色んな団体があるのや。会報をそれぞれ発行しとんねん、会報に出てくるのは、その精神やな。

斎藤 梅棹事件というのは、どんなんですか。

藤枝 梅棹が、誰かと、どこかで酒飲んで議論した。例

えば、冬に家畜に食わすために、夏の間に草を刈りこんでおく、そのために鎌を買ったんやね。日本から取寄せたら、日本の鎌やから蒙古人に合わへんわけや。誰も使わへんさかい、赤サビになって倉庫に放りこんであつた。そういうような事もあつて、このことを含むかどうか知らんけど、蒙古政府のやり方と、実際のくいちがいなんかについて、大激論したちゆうねん。梅棹に言い負かされた相手は、梅棹の青二才が、蒙古政府と大激論して、言い負かされた政府のやつは非常に怒ってる、そういう事を言うて回つて、それが、ほうぼうに聞こえたんやね。それで、そういう事をね、磯野と調査に回つた江上さんが、何処かで聞かされたんや。江上さんが張家口へ帰ってきて、奥地はえらい事になつると、梅棹の言うた事で、蒙古政府が腹立てるといふわけや。江上さんは正直やさかい、あの調子で、「大変だあ」言うて。こっちは慌てて、蒙古政府へ行つたり、大使館へ行つたりして了解とつて、もみ消しにかかつとつてん。そしたら、探検隊が帰つて来たたら、何やそれ、誰その話やないか、言いよんねん。それでまあ、梅棹の方は、何も知らずに機嫌良う探検いっとつたんや。そやけども、梅棹の知らん間に国際問題になつてしもてね。た

だ、具体的な話の内容、覚えてへんのやな、僕は。石田さんがそれ聞いて、所内の集りで大演説ぶってね、「我々は謙虚でなくてはならん」言うてね、そしたら、土橋中将が、「ここは外国なんやから、内政干渉の言動は慎むべきや」言うて。梅棹の何も知らん梅棹事件という、国際事件が起こったんやけど。

原山 宿舎の話なんですけど、もと隊商宿と言うんですが。藤枝 そうそう。それは、ここに書くこと思うて。「紙を出す」 中国風の家をね、中を畳敷きにしたいうて、改造

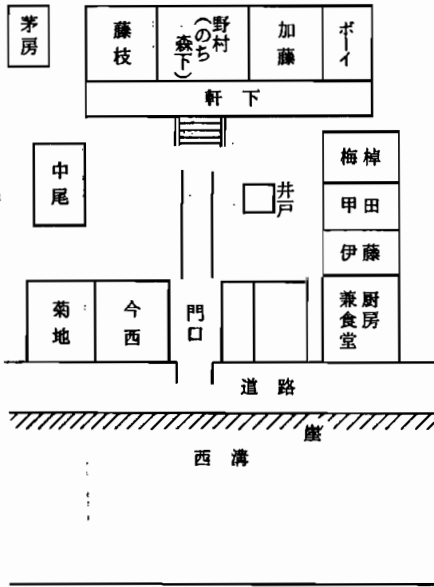


図2 西北研究所第一宿舎見取図

したん、東京の最新式のアパートをまねして、こういう具合の間取りにしたいうて。せせこましい、せせこましいんや。昔のね、オンドル付きのほうや、ずっと居心地いいんやけど。こういうとこで、畳敷きにしたらね、話にならんですわ。部屋の中は、ここが土間で、畳が八畳ぐらいやっただかな。〔図を書きつつ〕 部屋割はこうなつて、山の崖やから、ぼくらのとこは、一段高いねん。

原山 この山が、元宝山ですか。

藤枝 そないなるのやろな。これが、第一宿舎になつて、ここが元は調査部やつたんや。

原山 本部の方はどうなつていふんでしょうか。

藤枝 中国の四合院の形式になつて、奥の正房、つまり、一番の座敷が、所長室と理事長室と会議室とで、これが中庭で、両側に廂房があつて、下手に事務室があつて、宿直室がここやつたかな。

原山 かなり大きな建物ですね。先生、これ。

藤枝 立派ですよ、これは。院子ごとに段があつて、奥ほど高くなるので、よけい立派に見える。大きな商人の家やつたんちゃうかな。

原山 やっぱり、先生、大境門外のあたりというのは、西

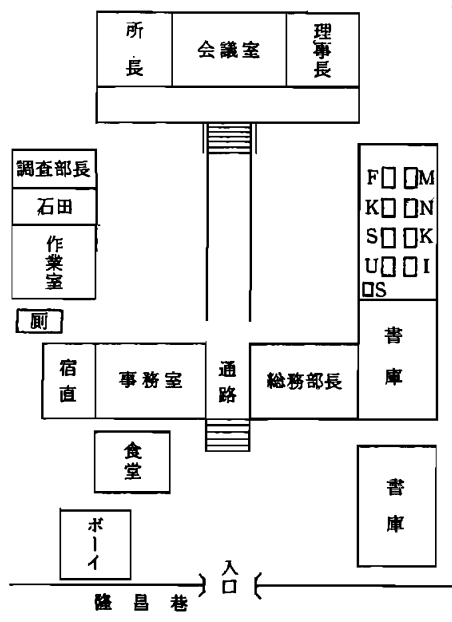


図3 西北研究所本部見取図

溝を渡って、随分蒙地貿易の。

藤枝 いや、西溝の河床そのものが道なんや、そやけど、もうその時分はあかん。僕らの住んでた頃は、そっちへ行く街道が、大境門で無うなって、平門という、そっちが表街道になってしもた。つまり、大境門からの道は、ラクダは通れるけどね、自動車通れへんねん。

原山 たいてい、大境門の写真ちゅうのは、ラクダが出てきて。

藤枝 ラクダ宿があったけども、トラックにおされて、だんだん。ラクダに限らず、市は時にたつんやけどね、衰

えてきて、むしろ市は平門の方へ移ったわ。

原山 全部そういうもんも、一切合財ですか。

藤枝 ラクダが通らへんねん。ラクダよりはトラックの方が、安うて速いのと違うかな。ラクダは、ラクダやないと行けんところだけの商売になって、だんだん、ラクダ屋ちゅうのが無くなりつつあって。

『千里眼』という、千里から出てる雑誌があるのや、それに、梅棹が、「中国語とのつきあい」という随筆を書いてるねん。張家口で放送局のアナウンサーに来てもらて、中国語の稽古して。嫁はんは一言も中国語を知らんでね、ある時、西溝の上の方で雨が降って、突然大水が出てね、日本人が一人溺れ死んだいうのを、梅棹の嫁さんが着いた翌日に、ボーイから聞いて。そんな話どうして聞いたいうたら、ボーイが身振り手振りで話してくれるの、なんとなく分ったちゅうねん。それ聞いてから、中国語勉強するの、あほらしなつたいうて。西北研究所一の中国語使いは僕やいうので、大使館附属の中国語学校の講師をいつかってな。生徒は大使館員ばかりや。それに『籌弁夷務始末』を読んできかしてやった。中国の外交文書は、こうなつてんのやいうて。名前全部覚えてへんな、その生徒。

そういうので、あんたらのねろてた話、こんなもんで。

「原山 いや、僕らが爰におたずねするより、よっぽど色んなことを教えていただきまして。話し続けでお疲れのことやと思います。」

藤枝 疲労のことはかめへんよ。もうちょっと材料があるとな。

### 〔休憩〕

藤枝 理事長おらんようになって、ほっとしたよ。<sup>28</sup> 軍人おらんようになって。西北研究所が、なんでこんな時に真の学術研究せんらんかいうたら、うしろの方で、何か悪い事する計画があつたんやね、調査部を作つてね。研究所はショーウィンドヤ。うしろで、調査部で情報をやつて。

もう一つ、土橋中将が考えてたんは、対敵貿易なんや。両方それぞれ、必需品でどうしても向こうから欲しいものがあるねん。どこかよその機関でやつた。これは、買うて来ただけ全部軍が買上げるから、確実な商売なんや、ラクダでこう運んで来るのはね。荷物が一つ着くとね、全部荷物ほどうてね、包み紙のウイグル語の新聞をね、ずっと拵げて、出来るだけ日付順に並べて、ニュースを搜すのやそ

うや。対敵貿易いうたら、そういうことも、重要な仕事なんや。そういう事から、中将自身は、もつといろんなことを考えていたらしい。そのためにね、表に出ず、さつき回の民女塾やかね、診療所やかね、高級学術研究所やかね、そういうもんが、必要やつたわけや。だから給料上からへんのですわ、インフレになつても、月給据置きでね。

行く前に、なんでここへ行く気になつたか、いうのが、重要な事なんやけども、今言うたように、一八年に居庸関調査に行つたんです。その時に、もう磯野が既に着いとるんです、それは知らんかったけど、酒井行雄が、もう、そこへ入ります言うて、決まつとるわけや。江さんが僕を呼んだのは、呼んだちゆうか、居庸関のチームの中へ入れたのは、西北研究所へ入れるために呼んだわけや。それで、大いに僕に勧めたけども、こんな非文化的なところへ来れるかいと言うて、胸張つて、その話蹴つて帰つて来たんや。そしたらね、銀閣寺へんに、その時分、在郷軍人会主催の宿泊訓練いうの、十日間か、二週間かやつて。僕は、それに予定されつたんやそうな。ところが、居庸関へ二た月行つたんでね、それから外れたんや。ところが、宿泊訓練行つたやつは、そのまま本召集になつたんや。船に乗つ



て、その船が沈んでね。居庸関から帰って来たら、葬式し  
とるねん、家から一丁程離れたとこで。それ一緒に宿泊訓  
練行つとつたら、エライ事になってたんや。ゾーツとして  
ね。これは、日本逃げださないかんと思つてね。

外国旅行する時は、区役所に旅行届出すのや。帰った  
ら、帰って来たい届、出来るだけ遅らして出しに行つた  
ら、ああそうですか言うて、ひょいと紙めぐりととりよつて  
ん。紙はつたつて、これは召集せんという事になってたん  
やね。何時、召集されるや分らへん。えらいことになった  
と思つて、西北研究所へ行くときは、早い目に、また旅行  
届出してね、四月頃から行くようにして。

原山 今西先生が、同じ事言うてはりますね。殺しては  
ならんというので、若い人を。

藤枝 出来るだけ勉強出来るように、連れて行く。しか  
し、行つたおかげで、命は助かったけども、東洋史が嫌い  
になつてな。東洋史なんていうのは、日本でこしらえたワ  
クやろ。それで、羽田〔亨〕先生におこられたよ。お前は、  
ワクを外そうとしてる。このワクを作るのに、わしらどれ  
だけ苦労したか言うて。ワクだけ作つてやつたら、後  
は、凡庸なもんでも教授になれる。そのせつかく苦労して

作つたワクを、お前は壊そうとしとる言うておこられたん  
や。数回おこられたで。東方文化ではね、本は最高無上の  
もんやつたけども、本よりは自分の眼を信用するというこ  
とを覚えて帰つたんや。

西北研究所の中でね、やつぱり、それぞれ優秀やけどね。  
一番若い梅棹、甲田の二人は、これは上出来の人物やな。  
甲田ちゅうのは、信州から来て、東京高等学校出てるんで  
す。東京高等学校いうたら、日本中の高等学校で一番スマ  
ートなとこや。一高は全国からイナカモンが寄つて来るね  
ん。東京高等学校は、イナカモン入れへんさかい。彼は、  
中学校を田舎でやつて、高等学校へ途中入学したら、同級  
生と調子合わすのに苦労したちゅうねん。甲田君はしょつ  
ちゅう忠告してくれるんでね。大いに成長したと思うな。

それに、東大の社会学を出てるということもあつて、今西  
学の凄さに早うに気が付いていた。つまり、今は遊牧社会  
の調査などで、まだ半分動物植物に関わつてるけども、その  
うちに動物なんかからはみ出して、専ら人間社会学に向か  
うということ、その頃に指摘してた。興安嶺やポナペの  
話を聞いてるうちに、それを感じ取つたのや。おかげで、  
戦後、今西さんが人間の社会調査をやり出した時に、びつ

くりした人も多かったですけども、僕はちょっと驚かんだ。梅棹はあれ、人に忠告するだけの余裕はないのやけども、彼自身、やっぱり頭のええのには感心した。一番損したのは森下やろ。森下君はね、ケンカして設立して、僕等が着いてからいっぺん京都へ帰って、それで、石田さんの秘書をしてた人と結婚した。そしたら、戻って来るなり、その奥さんが病気になるってね、肺病で。森下は、そやから、九月のモンゴル調査に入れなんだんやないかと思うのや。

そのあとで、今度は嫁さん置いて召集されてしもて。荷物戻らへんかったのとちゃうかな。戻ったんかな。嫁はんが両手に持つもんだけしか戻ってないねん。そして、その嫁はんが死んでもたやろ。大変な貧乏クジやったんやけども。森下はね、小学校五年から、中学校へ入って、中学校四年から、高等学校へ。土佐中学言うて、秀才教育の学校や。

理科は全部今西スクールで、僕だけが違うのや。僕は今西さんと、探検地理学会の発起人会で会ったのが、初めてやけども、この人「斎藤清明」の本に、僕が一人場違いであつたと書いてるのやけど、それは僕が言うたんや無うて、誰かよそで聞いたと言うてはるねん。言うた人は、な

んで場違いなんか言うてないいうて。それはね、発起人会にね、僕一人が、羽織袴やってん。皆勇ましいなりして来とってん。登山靴なんか履いとるのに、役員会にわしいつも羽織袴で行つとったな。そんな面白い話、この人書いてへんので。

森田 北京と張家口とは、年中行つたり来たりしてはたんですか。

藤枝 僕が行つたり来たりしてた。

森田 それは、仕事ですか。

藤枝 とにかく張家口は非文化都市やからね。北京まで行くと、ホッとするのや。それで、何かと用事こしらえて。第一回は、何か、あの回教調査の後始末か何かの相談いうて、岩村さんたちが、北京まで帰ったのを追いかけたことがある。そのあと、蒙古政府が蒙古文化館に買入れる本をね、江さんが連れて行つてくれて、蒙古政府の出張旅費で、本屋回りにいった。

森田 今の蒙古文化館、昭和二十年ですか。北京に本屋というものが、まだ機能してたんですか。昭和二十年の北京というものは。

藤枝 ちゃんと。北京はもう平和なもんですわ。

森田 平和なもんで、琉璃殿なり、隆福寺なりへ行けば、ちゃんと本屋があったという、二十年でもそうですか。

藤枝 学生の時に北京へ行った時の本屋の小僧が独立して、一軒の本屋になって、調査部の本を全部納めとる、びっくりした。そうすと、そういう丁稚は、僅かな本のためにしよっちゅう張家口まで来て、これでいいのかな思たら、いまのアヘン運びよるねん。冬ね、零下二十度でしよ。

野菜が全部凍ってしまうのや。凍った野菜なんて、食べられたもんやないですよ。ところが、そういうもんしかあらへんねん。そうすと、凍ってないのは、その頃の値段で十円するのやね。十円いうたら、北京・張家口間の二等旅費や。二円ほどで北京で二つ白菜買うて、さげていったら、汽車賃は浮くわけや。ほんで、帰りにアヘン持っていったらええねん。南口で税関検査するのです。ヨーロッパの国境越すのと同じこっちゃ。持ち金全部替えさすのや。

東洋史の關係では、今西春秋が北京におってね。一度、今西さんが、それも引つ張りこめいうて呼んだのやけども、手紙書いて。佐藤長やなんかもね。そのうちインフレになって、増員できる予算がないようになってね、空回り

になってもうたんや。

森田 あと東洋史の人で、その頃、そちらに居てはったいうたら。

藤枝 蒙古政府では、森一郎が最年長で、原八郎と、それから武田豊と。武田豊は、カンの悪い男やったな、あれ。もう戦争しまいかけてるいうのも、実感ないみたいや。つたし、それから、天津の収容所に着いてから、「あんたらは回民達と仲良うしてたから、こういう時になっても、あの人達が、保護してくれるでしょう」と。馬鹿言えと答えた。我々と仲ようしてたのは、皆漢奸でね、ひどい目におうとるのにね。そういうとこのカンの非常に悪い男やったな。

その一二月の寒い時に、北京へ出てきて、石鹼が湯にとけるのやね。ホツとしたね。向こうは、水が硬水やから、石鹼とけへんねん。

それまでは毎年暖かかったのが、一月の二五日に、大雪降ったんや。この本「冬のモンゴル」読んで、愕然としたのは、一月の二四日に出発しとんのやな。大雪の前日に。二五日は、僕の結婚記念日やから、ちよつと祝いごとがあるから、ご馳走したるいうて、森下正明と梅棹夫

人を街へ連れて行って、橋を渡って、かなり豪華なご馳走したんや。どういふ祝いごとやいうて、ちょっと聞いたけども、あと詳しいに聞きよらへなんだ。そしたら、その晩、大雪が降って、とうとう三月までとけなんだ。そうそう、宿舎では、月に一、二回俳句会をやってん。加藤泰安が宗匠でね。今西さんの句の中には、「現地系」なんていう言葉が出てきよんねん。

森田 会と言えば、定例の研究会みたいなやつてはったんですか。

藤枝 やった。僕が、研究所である以上、それやらないかん、言うて、初めは、研究所の組織について議論して、それから、各自のテーマについてのコンフェッション、現地調査が始まると、その計画やテーマについての準備発表があつて、帰つて来たたら、報告の発表をやつた。それは、もう年越してたな。その頃には、街のインテリ呼んできて、むしろ研究会するから、よければ来い、いうて。それにしよっちゅう来たのは、江商の支店長と華北交通の課長や。

華北交通と仲ようして、一等パス貰うてね、それで、しよっちゅう北京行つとってん。タダで。その他に、涿鹿と

いうとこへ行つた。蒙疆で、唯一つ米のとれる所や。日本軍は大事にしてるわけや。同時に八路軍は、それを狙うわけや。それで、そこへ行つたら、回民女塾が、そこへ修学旅行するのと、一緒に汽車になつて。娘さんたち、うちへきてくれ、うちへきてくれ言うて、その家をずつとまわつた。あのへんが、河北方言と山西方言の境なんや。「我」を北京でウォーと言うのが、張家口ではンゴ、涿鹿へ行くと、イスラムはンゴ言うて、漢人はウォーや。そのの県公署にころがりこんだんや。そこに単身赴任の連中が、一緒に寝泊りしてるクラブがあつてね。そこへころがりこんで、四、五日遊んどつてね。県の参事官の樋口(註)というたかな、大阪外語の卒業や。役人から、警察官から、全部中国語の名人を揃えとるねん、彼の方針で。役人としての才能は、そいつらは落ちるちゅうねん、あれは警察官として、戦争はあまり上手やない。しかし、住民の反感こうたら、民政は出来んと。それで、言葉の出来るやつばかり面白かつたよ。

原山 あまり長いですし、先生はほんとにお疲れで。また先生、この機会、是非作つて下さい。これ、おこしましてね、お話しかがつてる中でも、これうかがいたい、とい

うのが、色々あったんですけど、また、それ取纏めまして、それについて。

藤枝 第二回やろか。

[注]

- (1) 善隣会編『善隣協会史―内蒙古における文化活動』(日本モンゴル協会 一九八一)以下、「協会史」と略。
- (2) 以下、当時の現地関係者については、『蒙疆年鑑』成紀七三年(昭和一九年)版(蒙疆新聞社 一九四三)中の「蒙疆・華北人名録」の記事を、現住所を除きそのまま引用して注とする事とし、その場合、(蒙)と注記する。同書の記載順序は、生年、本籍、学職歴、現職の順で、音尾の場合、「明三九、東京、明大法、満蒙学校講師、善隣協会総務部長」となっている。
- (3) 大二、秋田、早大法。(蒙)
- (4) 明一八、兵庫、京大医、医博、同仁会蒙疆支部長、京大医学部教授。(蒙)
- (5) 本稿完成後、藤枝博士より、昭和一三年の「西北研究所」計画について次のようなコメントがよせられた。  
江実さんのところで、「西北研究所と刷りこんだ野紙を見せられたことがある。厚和でこの様な計画があったのだからである。あるいはその関係だったのだろうか。また、昭和一八年に、厚和の「西北事情研究所」の小村不二男という人に本を送った控も出てきた。これも何か関連があるかもしれない。

(6) 当時、善隣協会理事長。注(8)参照。

(7) 梅棹忠夫「モンゴルの乳製品とその製造法―乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」『内陸アジアの研究―ヘイン博士記念号』(ユーラシア学会 一九五五)。とくに二五五―二五八頁を参照のこと。

(8) 日本近代史料研究会編『日本陸海軍の制度・組織・人事』(東京大学出版会 一九七〇)所載の略歴を抄録すると「鹿兒島出身。明治一九生。三八陸士卒、三九砲少尉、大正六陸大卒、昭和一〇少将・技術本部総務部長、一一自動車学校長、一三中将・二二師団長、一八・四予備役、二〇・三召集。」  
(9) 明二九、大分、師範、善隣協会回民女塾長。(蒙)

(10) 明三九、大阪、京大医、医博、同仁会蒙疆衛生研究所長兼蒙疆防疫処長事務取扱。(蒙)

(11) この二人および肅親王家については、この対談を参照。

(12) 大三、秋田、京大史、蒙古政府総務庁事務官。(蒙)

(13) 大四、盛岡、京大史、中央学院教育。(蒙)

(14) 徳王については、様々な評価があるが、当時の位置付けを知るために、以下に『蒙疆年鑑』昭和一六年版の記事を引く。

(徳王) 德穆楚克棟魯普

蒙古聯合自治政府主席光緒二十八年元旦内蒙錫林郭勒盟に生れ一九一九年十四歳のとき西蘇呢特札薩克の職につき、一九二四年十九歳にして錫林郭勒盟副盟長となり、次いで察哈爾省政府委員、西蘇呢特旗長、蒙古地方自治政務委員会秘書長等歴任し、一九三三年内蒙各盟旗王公代表三十余名を綏遠省百靈廟に召集し、南京政府に向つて高度自治を

要求行余曲折の後中央監督下の下に内蒙地方自治委員会なるものが成立し、雲王を委員長に徳王を秘書長に推し、蒙古復古の建設運動に邁進したが、南京政府は徳王の主張する蒙民自決主義を喜ばず、蒙政会を組織するなど種々工作をなす中、綏東事件等を経過し支那事変に際会するに至った。其の後蒙古聯合自治政府成立するや雲王の後を享け主席に就任、現に蒙古聯合自治政府主席たり、氏は若冠北京蒙蔵学院に学び家庭教師を容れて常に泰西の事情並に政治外交に就き研究し、世界の大勢に通曉する新智識者として内蒙青年間に(チンギス・ハン)の再来と仰がれている。

なお、中国における最近の徳王についての研究として、董明輝著「蒙古自治運動始末」(中華民国史資料叢稿 中華書局 一九八〇)及び同「徳穆楚克棟魯普」(中華民国史資料叢稿 中華書局 一九八〇)などがある。

・民国人物伝二 中華書局 一九八〇)などがある。

(15) 明三九、駒大、善隣協会興亜義塾教務主任。(蒙)

(16) 成六七八、卓(案図)盟喀喇沁右旗、日本陸士、蒙古地方自治委員会委員、蒙疆新聞社監事。(蒙)

(17) 「今西錦司氏に聞く」「自然学」まで」(「ちくま」一五五 一九八四)

(18) 民族研究所・西北研究所共編「第一期蒙疆回民調査項目」(一九四四)

(19) 岩村忍「中国回教社会の構造」上・下「社会構成史体系」五、六(日本評論社 一九四九、五〇)

(20) 今西錦司「内蒙古草原の地理的位置づけ―特に軽草原を中心として―」遊牧民族の社会と文化 ユーラシア学会研究報

告(自然史学会 一九五二)。なお同論文には、詳細な調査日程も付載されている。

(21) 今西錦司「私の履歴書」「日本経済新聞」一九七三年一月一日―一月三日(三十回連載)。のち「今西錦司全集 第十巻」(講談社 一九七五)。

(22) 同「張家口おち」遊牧論そのほか(秋田屋 一九四八)。のち「今西錦司全集 第二巻」(講談社 一九七四)。

(23) 同「私の履歴書」。

(24) 磯野富士子「冬のモンゴル」(北隆館 一九四九、のち中公文庫 一九八六)。

(25) 明治四二、佐賀、京大史、錫林格勒盟参与官、察哈爾盟参与官。(蒙)

(26) 曾我孝之、明治三八、熊本、京大経、北大教授、在張家口大使館文化部長。(蒙)

(27) 「千里眼」第五号(一九八四)。

(28) 土橋理事長は、一九九年秋発病し帰国後、二〇年三月召集、後任は赴任するに至らなかつた。『協会史』三三頁。

(29) 斎藤清明著「京大人文研」(創隆社 一九八六)。

(30) 樋口仁、明治四四、大阪、大阪外語、陽原興参事官、宣化省民政処参事官。(蒙)

# 会 報

## ◇史学会総会

奈良大学史学会の第四回総会は五月三十一日(土)六〇一教室で行なわれた。阿部顯介学生委員司会のもと、一九八五年度の事業、会計、会計監査の各報告が滞りなく行なわれた。ついで、一九八六年度の役員人事案、事業計画案〔「奈良史学」発行、会報発行、現地見学会、卒論中間報告会、学内の教員による講演会等〕と、それに伴う予算案が提案され、それぞれ原案どおり承認された。一九八六年度の役員はつぎのとおり。

▽会長 堀内一徳   ▽副会長 菅野 正

▽教員委員 松山 宏・水野柳太郎(監事) 鎌田道隆

(編集) 青木芳夫・森田憲司(庶務) 明石岩雄(会計)

▽学生委員 山田浩之(代表) 葉 敦子・中村真沙美・

正多孝幸・普川佳明・大東 仁・西山真弓・中原 康・桃

木雅代・角 洋介・津田真希・福田祐子・長谷川 清(以

上総務) 斎藤智美・江見信彦・守田勝豊・山口富生・勝

又秀行・高垣直史・天草千晶・林 公子・山田友香子(以

上編集) 山下尚幸・広瀬 毅・大石英幸・西川輝之・外

山千春・垣東充生・阿部顯介・田村 充・中越本子(以上  
広報)

## ◇講演会

五月三十一日(土)、史学会総会にひきつづき、奈良大学  
史学科・史学会共催による特別講義が、例年どおり左記の  
ように行なわれた。

京都大学文学部教授 越智武臣氏

英国初渡航の日本人

京都大学工学部教授 西川幸治氏

地域文化財の保存修景計画

——歴史的環境の保存と法則——

両先生による講演は、長年の研究の一端を批瀝されたも  
ので、他学科からの聴講もあり、六〇一教室がほぼ満席と  
なる盛況であった。

## ◇卒論中間報告会

十月十一日、十八日の午後一時から、卒論中間報告会が  
六〇一教室において行なわれた。今年度で、この会も三回  
目を向かえ、今回はすべてのゼミから報告者が出ていた  
いた。十一日、十八日、両日とも七〇名以上の、熱心な学  
生が集まり、熱のこもった報告・討論が行なわれた。